

# 集

俳句フォーラム

2023年1月 第86号



円の会

猛暑 大山夏子

鳶鳴くや夏ゆうぐれの波静か  
投薬を数える旧課夏終わる  
垣越しに揺れて顔出す百日紅  
みんなの初鳴き朝の散歩道  
月命日うかつに過ぎる猛暑かな

如何に 若泉真樹

沖繩忌海の真青を如何にせん  
学徒兵の遺し逝く愛夏の雲  
炎昼の影が小さく欠伸して  
此処孤島郭公の鳴く空碧く  
逝く夏を見送っている鏡の間

雲の峰 石川東児

多事あれど何はともあれ初鯉  
梅雨明けや軒に未だ乾かぬてる坊主  
老鶯や山家の門に出迎えて  
富士仰ぐ猛暑息災感謝して  
雲の峰猫も見てゐる天城山

鶏頭

仁上博恵

鎮魂の時間連れ来る紅鶏頭  
フルートの調べ半音秋の風  
白百合の一気に開いて書の解放  
合歓の花愛でいてジムに遅刻する  
うな重をひとり満喫健診後

今へ

瀬戸美文

満員のナイター観戦役を経て  
らつきよう漬ける見ている母の笑みうれし  
風も光も青春の日のさくらんぼ  
枝豆を摘むわが指は母に似て  
原爆忌今ウクライナをおもいつつ

晩夏光

日置瀨魚

打ち水や昭和の心吾に深く  
地ほてりや事の始めの命水  
酷暑かな雲は渦巻く造形美  
従兄弟再従兄弟混沌として遠花火  
晩夏光貧しき言葉紡ぎをり





人間魚雷

渡辺節子

夏草に朽ち果つ人間魚雷かな  
夫が恋う祇園祭に吾子と居る  
夕顔のように朋逝く朝ぼちけ  
空蟬のそばでミンミン読経あげ  
無人駅果ては無限の秋の海

カンナ

江口九星

緋のカンナ没日に負けず咲き誇る  
恋多き和泉式部や夏の蝶  
カナブンは不愛想に来て消えにけり  
草むらに亡母と出会う茗荷かな  
妻作る梅のジュースの三年目

濁り酒

中川のぼる

情理かな二律背反土用風  
暑気払い呂律回らず臍を噛む  
廃校舎蝸鳴くは子ら恋うや  
秋の夜恋と愛とはすれ違う  
いつになく言い争って濁り酒

秋残照

伊藤昌枝

夏安居の終うる律僧風を欲る  
孟蘭盆会行けぬを詫びて亡母恋し  
鰯とんで海の色濃き羽田沖  
小鳥来るときめいている神の森  
親知らず子知らずに佇つ秋残照

とんぼう

吉宇田麻衣

とんぼうの羽化見届ける水鏡  
在る筈と何度も探し秋の空  
不文律当てはめている夏の空  
間違えに後で気付いて夏帽子  
朝涼やもう一品と作り置き

一色海岸

大山夏子

魂送り家中の眼に見守られ  
一色海岸父母在りし日の寝莫座かな  
雷遠し友一人ずつ逝きしかな  
月の出を肩並べ見し亡き友と  
兄が逝き弟が逝き秋ひとり

案山子

楠本和弘

でで虫と棚田なだるる日本海  
雨蛙ひよこひよこぴよんと吾の前を  
雲の峰回し蹴りする山男  
天高しジュラ紀の奇岩波を咬む  
ぽつねんと案山子残さる田の畦に

吐息

渡部恭子

夏の星滲むサキソフオンの吐息  
口喧嘩したこと恋し盆の月  
日焼けの子立ち寝を抱え込む車中  
アベマリアの歌の残響風の色  
富士残照遠くに見えて虫集く

一日

小澤えみ子

ちぐはぐな一日の終わりに髪洗う  
九十の筆圧強し夏見舞  
子規庵の手塩にかけし糸瓜かな  
無言館辞してかなかな無言なり  
雲の峰尾瀬の木道声交わす

恋文遺集

酒井たかお

花莫塵に寝ころびて聴く昭和うた  
大向日葵軍靴争う迷路かな  
精霊舟沖へ担ぎし月の帯  
知覧かな恋文遺集つくつくし  
金木犀荒ぶる地にも届けたや

白秋

由良則子

どんな世も律儀通して晩夏逝く  
何恋うて激るサルビア赤々と  
生の尊厳向き合っている白秋  
心揺らしたき日は狗尾草揺らす  
白粉花の紅濃く残る夕間暮れ

行き合い

高畑太朗

早朝は高原の風土用入り  
幾万の恋を蹴散らし敗戦忌  
秋隣人恋しいか海鳴りす  
夜長かな付箋だらけの方丈記  
行き合いの雲は秋色飛機を染め

鳥 賊

星野喜郎

かつて妾宅多き浜町金魚売り  
首に汗汗鳥賊を干すおばあちゃん  
初恋のことなど語り水羊羹  
妻逝きて草取りの手の滞る  
里芋のぬめりも嬉し縄暖簾

# 九重句会

想定外

細井寿子

泰山木終の一花は天に捧ぐ  
さくらんぼのときめき色を手を受けて  
猛暑日や想定外は世の常よ  
終戦日野の花みんな頭たれ  
飛行機雲まつすぐ西へ綿の花

律

若泉真樹

夏の蝶舞うや放哉の自由律  
蛍飛ぶ昭和レトロのアンニユイ  
いにしえの道は哲学苔の花  
他律は自律噴井あふるる滾滾  
捨て台詞心に残し秋夕焼

片陰

伊藤美沙江

薔薇が満開吾のウクレレもほぼ満開  
たつぷりと夕焼も畳むタオルかな  
電柱の小さき片陰バスを待つ  
秋なのに此の蒸し暑さ絞りたき  
初秋半月日暮れの少し早まりて



雁来紅

鈴木公子

見えねども猛暑のべールまといつく  
原爆忌あの拳万はセピア色  
夏行くや仕切り直しのルーティーン  
ひと言が事の始まり雁来紅  
持て成しは水盤散らすへんルーダ

白日傘

大山夏子

炎天の歩道にマスク踏まれおり  
遠雷の二声三声返事欲し  
白日傘たたみ哀しみたたみ込む  
雷遠し傍らに友居るごとし  
眼帯も眼鏡も乗せて耳暑し

異常気象

日置游魚

耳鳴りのよう異常気象の蝉の声  
ビールぬるし一人の闇を深くして  
新涼や朝令暮改をくり返す  
雷真上テレビドラマの恋佳境  
巻き戻す時間は無意味新台風